

右側肝円索（門脈分岐変異）に合併した肝門部胆管癌の2切除例

中村太郎 大谷広美 森本真光 白井 信 田中 仁 坂川太一
橋田裕毅 藤山泰二 串畑史樹 山下広高
福原稔之 八杉 巧 本田和男 小林展章

愛媛大学第1外科

肝門部胆管癌は複雑でバリエーション豊富な肝門部解剖構築領域に発生し、周囲脈管に浸潤することの多い疾患である。今回、肝門部胆管癌の2症例で右側肝円索を特徴とする特異な門脈分岐形態を認め、根治手術を施行し得た2例を経験したので報告する。

症例1：63歳女性、全身倦怠感を主訴に近医受診し、肝機能異常を指摘された。精査にて総肝管に隆起性病変と同部分の狭窄あり、肝門部胆管癌の診断で当科紹介となった。腹部CT検査上、門脈の分岐異常（門脈本幹から後区域枝が分岐した後に前区域枝と左門脈が分岐）あり、胆嚢頸部は門脈本幹の左側に位置していた。主病変は総肝管から右肝管に位置し、手術は右三区域切除+尾状葉切除を行った。腫瘍は管内進展型（乳頭浸潤型）で壁外脈管への直接浸潤は無く、脈管の合併切除は必要なかった。術後高ビリルビン血症と腹水貯留が若干遷延したが、術後39日目に軽快退院した。

症例2：78歳女性、近医の腹部超音波検査で左肝内胆管の拡張を指摘された。精査にて左肝管に全周性狭窄あり、肝門部胆管癌の診断で当科紹介となった。腹部CT検査

上、門脈の分岐異常（門脈本幹からP2+3が分岐した後に右門脈は大きく右側を回り、末梢でP4の枝が分岐）あり、胆嚢は存在しなかった。術前から右門脈への腫瘍の浸潤が疑われた。手術は左葉切除+左尾状葉切除を行った。腫瘍は管外進展型（平坦浸潤型）で右門脈に強固に癒着しており、右門脈合併切除を行った。術後経過良好にて術後27日目に軽快退院した。

術中所見としていずれの症例も右側門脈の末梢に肝円索が付着しており、右側肝円索（いわゆる左側胆嚢）と診断した。Nagaiら（Ann Surg 1997）の分類に従うと症例1はTrifurcation type、症例2はBifurcation typeであった。いずれも術前に脈管構造を熟知して手術に望み、根治術を施行し得た。

肝門部胆管癌は管外進展し周囲脈管に浸潤することが多い。その根治術においては複雑多岐にわたる脈管の立体解剖を十分把握することが必須である。脈管分岐変異のある症例では残肝の血流を維持するためにさらに慎重な解剖把握が必要である。

系統的肝切除・肝外胆管切除における胆管枝の解剖と再建

松永和哉 榑野正人* 西尾秀樹* 上坂克彦 二村雄次*

静岡県立静岡がんセンター肝胆膵外科 *名古屋大学医学部器官調節外科

目的：系統的肝切除に肝外胆管切除を付加した術式の際、肝切離面に現れる胆管枝の解剖、胆管形成と縫合不全について検討した。

対象と方法：1990年1月より2002年12月までに名古屋大学器官調節外科で経験した胆嚢癌を除く胆道癌に対し、肝右葉切除、肝左葉切除および尾状葉切除、肝外胆管切除を施行した110例（A群；肝右葉切除53例、B群；肝左葉切除57例）を対象とした。術前胆道造影、手術所見（手術記事、術中写真）から露出した胆管枝を同定し、また、手術記事より胆道再建の際の胆管形成の方法と胆管空腸吻合の縫合不全について検討した。

結果：（切離面に露出する胆管枝について）A群；左肝管1本が17例、B2+3、BまたはB2、B3+4の2本が25例、2+3a+4、3b（南回り）の2本が1例、3本に分かれたものが6例、4本が4例であった。B群；右前区域胆管枝の本数を基準に分類した。右肝管1本が6例、1本の前区域枝が12例、2本が20例、3本14例、4本が2例、5本が3例であった。これらに加え右後区域枝の合流形態の組み合わせについても検討した。

（胆道再建について）A群；1本に形成したものは24例、

2本に形成したものは5例、形成しなかったもの7例であった。B群；1本に形成したものが11例、2本に形成したものは24例（前枝（A）と後枝（P）の2本が15例、P+8cとA-8cの2本が5例、P+Aとその他のAが4例）、3本にしたものは形成が3例、4本に形成したものは1例、形成をしなかったもの11例、不詳1例であった。

（胆管空腸縫合不全について）A群で3例、B群で4例に発生した。A群では、2本が露出した2例と3本が露出した1例に対し、いずれも1本に形成した。B群では、1例は2本が露出し、形成を行わなかった。3本が露出した3例のうち、2例は2本に形成、1例は1本に形成した。

考察：肝外胆管切除を伴う肝右葉切除・左葉切除では肝切離面に露出する胆管枝の分岐が多岐にわたる。右葉切除の場合は、43例（81%）が2本以内の露出で済み、再建はすべて2本以内でおさまった。一方、左葉切除は多岐にわたって、2本以内の露出は16例（28%）にすぎなかった。また再建に関しても、2本以内でおさまったのは35例（68%）にすぎなかった。これは、AとPの距離の問題であると推測された。